

## 第6回「今後の看護教員のあり方に関する検討会」資料

# 看護実習教育における 看護教員の学習支援について

福岡県立大学看護学部

安酸史子

# 専門家教育としての看護実習教育

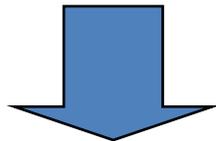
- 技術的合理主義による専門家教育の限界
- 「反省的実践家」としての専門家教育の必要性
- 専門家教育の方法＝経験から学び、理論と実践の統合をはかる  
実践の中の理論(Theory in practice)
- 専門家の教育(学び)＝実践経験と専門的知識による  
省察(reflection)と判断(judgment)の教育(学び)
- 専門家教育の方法      メンターとケース・メソッド
- 質の良い授業をしない限り学力は上がらない  
    質の高い実習教育の方法論を検討する必要がある
- 教師を幸福にする必要がある

佐藤学 教授(看護学教育学会教育講演 2007.8福岡)

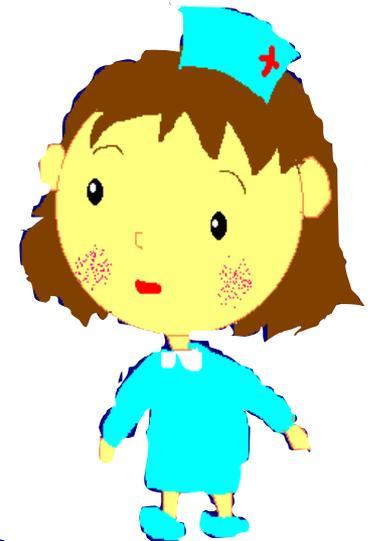
# 実習教育における教師の役割

## 学生の経験の意味の深化と拡充の支援

これを可能にするのが  
J.デューイの提唱する  
反省的思考 reflective thinking  
と呼ばれる「探求」



経験型実習教育

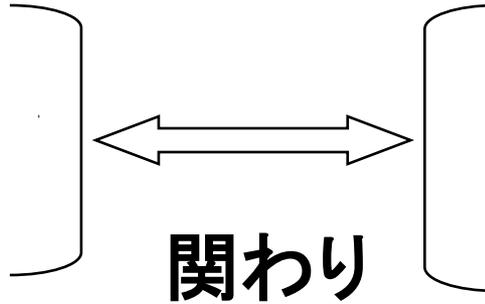


# 経験型実習教育とは

- ◆ 経験から学んでいくという学力を重視する臨地実習教育の方法論
- ◆ 「臨床の知」の修得に焦点
- ◆ 学びの方向性は「ヒューマンケアリング」
- ◆ 学生が直接的経験の意味を探求し、反省的経験に深化させていくプロセスに教師が対話を通して関わる (reflective thinking)

**患者**

態度  
反応  
表情  
病状  
etc.



感じ  
ねがい  
期待  
考え etc.

**学生**

**教師による援助**

- ・ 学生の直接的経験の把握
- ・ 明確化(対話を中心に)
- ・ 学習可能事項を考える
- ・ 関わりの方角性を考える
- ・ 経験の意味づけの援助

**直接的経験**

素材



教材

**反省的経験**

**学生による探求**

- ・ 直接的経験の振り返り
- ・ 直接的経験の表出
- ・ 教師からの働きかけを受け止めながら、経験の意味を探求する

# 経験型実習の授業展開の流れ

## (1) 実習オリエンテーション

実習目的・目標を確認しあうとともに、教師の役割を伝え、積極的に教師を活用するようにと話し、学生のほうの努力も期待していると伝える。(契約)

## (2) 学生が学習上の悩みや困りごとを相談しやすい環境(物理的・人的)を作る

- ・学生が早く環境(病棟、指導者等)に慣れるよう配慮する。
- ・話しかけやすい雰囲気醸し出す努力をする。
- ・記録の場、カンファレンスをする場を確保する。
- ・学生の強みを見つけて、強化する。
- ・実習に対する期待感を高める(教員、指導者と対話することの価値観を高める)

### (3) 学生の直接的経験を把握する(見る、聴く、読む、対話する)

- ・学生の実習記録を直接的経験が把握できるものにする。
- ・学生の直接的経験を把握するための時間を確保する。
- ・実習記録はその日のうちにコメントを付けて学生に返すようにする。 \* 実習記録の内容は前日のものである。
- ・学生の受け持ち患者と1日1回は必ず話をするようにする。
- ・学生と対話し、学生の現在困っていること、気になっていることをよく聞き、受け止める。(傾聴、共感)
- ・自己表出の少ない学生の場合には、学生の困っていること気になっていることを学生の反応や受け持ち患者の反応から推測し、確認していく(推測、明確化、確認)

#### (4) 学生の直接的経験の意味づけの援助をする

- ・この経験から学生の学べる看護(学習可能内容)を考える
- ・学生と対話し、学生の直接的経験を明確にし、理解する過程で、学生の反省的思考 reflective thinking を深める
- ・学生に思い込みがあれば、違う視点を示して、時には思い込みを論破する。

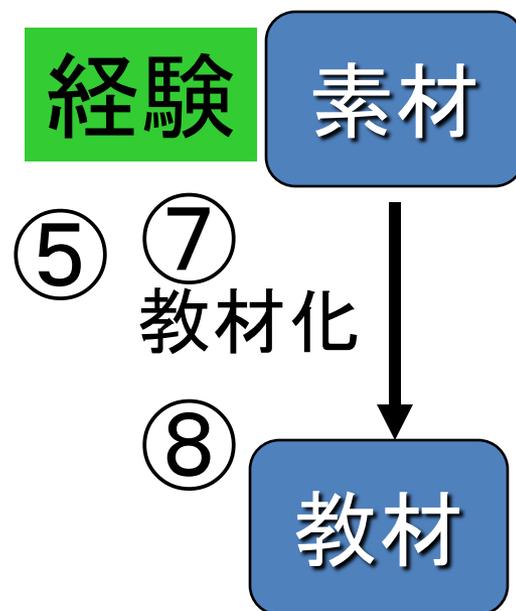
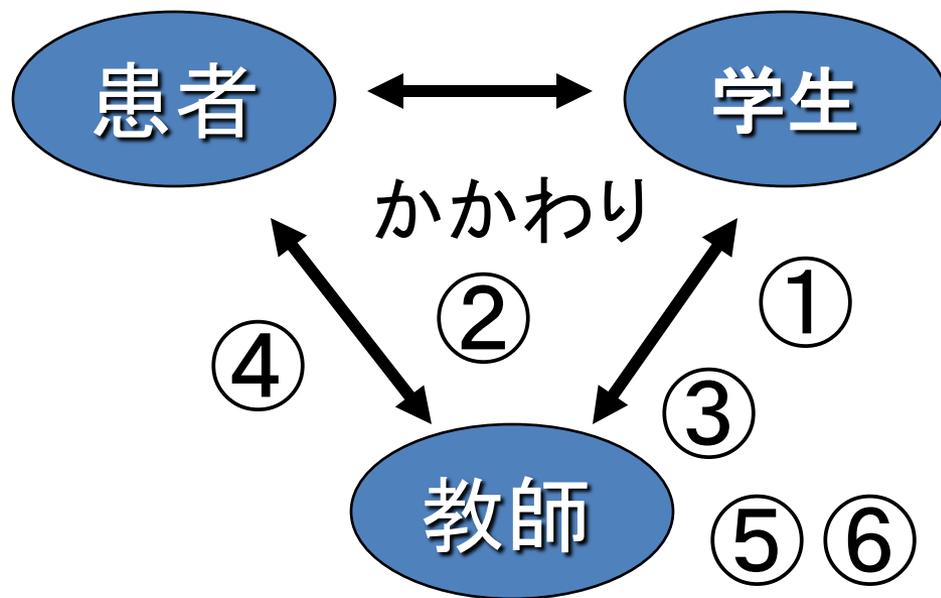
#### (5) 学生をエンパワーし、自己効力を高める

- ・学生のコミットメント意識を高め、自主的学習が促進するように関わる。
- ・成功体験を一度でいいから味わってもらう
- ・ロールモデルとなり、モデリング効果を高める
- ・できたこと、頑張ったことをきちんとほめる
- ・マイナス思考をポジティブシンキングに切り替える

#### (6) 実習教育の評価をする

- ・教師と学生による学習結果に対する形成的批評を行う。

# 臨地実習での教材化に必要な教師の能力



① 学生の学習への信頼

② 学習的雰囲気

③ 学生理解の能力

④ 患者理解の能力

⑤ 言語化能力(知識)

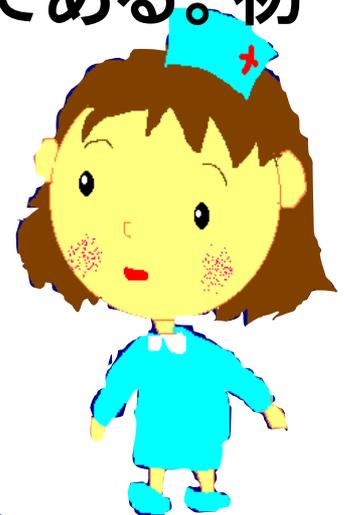
⑥ 状況把握能力

⑦ 臨床教育判断能力

⑧ 教育技法

# 教材化の事例

Nさんは48歳の女性。糖尿病性腎症が進行して透析療法が必要となったために、内シャントの手術を受け透析導入となった。透析療法を受け入れられずに拒否していたと外来カルテに記載されている。受け持ち学生Aは人と話すのが苦手で、緊張傾向の高い学生である。初めてシャント音を聞かせてもらったときに「気持ち悪くない？」と聞かれ、瞬間的に「そんなことはないです」と答えたものの、何でこんなことを聞くのだろうと感じた。と実習記録に記載してきた。



# 学生の直接的経験の推測

- 包帯の上から聴診器をあてて聞いたけど、よくわからなかった。どのくらい聴診器を押し当てていいか教えてほしかった。
- 聴診器でなんとかシャント音らしきものが聞こえたけど、これがシャント音？と思っていたら、患者さんから「気持ち悪くない？」と聞かれてびっくりした。
- 患者さんは何であんなことを聞いたんだらう。瞬間的に否定したけど、あれでよかったんだらうか。どう対応すればよかったんだらう。 等々

学生の背景(学年、事前学習状況、学習レディネス、性格等)、臨床状況から推測

＝学生理解の能力、状況把握能力

# 患者さんの状況や気持ちの推測

- 学生がおどおどした感じで聴診器をあててるけど、気持ち悪いんだらうか。
- 透析はしたくないと外来で頑張ったけど、ついにシャントのOPを受けるところまで来てしまった。包帯の下はどうなっているんだらう。Drから説明は受けたけど、なんだか自分の身体じゃないみたい。気持ち悪いな。学生はどう思っているんだらう。
- この学生は自信がないようだ。緊張が強くてあまり上手にコミュニケーションもとれない。こちらから話しかけてあげよう。 等々

患者の背景(病名、病期、治療法、性格、家族背景等)、  
臨床状況から推測＝患者理解の能力、状況把握能力

# 学生の強みと課題

## <強み>

- ・実習記録に気になったことを記載することができる
- ・シャントのOP後にシャント音を確認することができる
- ・実習に休まずに来ている 等々

## <課題>

- ・緊張感が強く、患者とのコミュニケーションが苦手
- ・患者心理の推測力が不足 等々

学生の強みを認めて強化するとともに、課題の解決を一緒に行う

学生の自己効力感を高め、エンパワーする  
＝学生の学習への信頼、学習的雰囲気

# 学習可能内容

- 患者心理の理解
- ボディイメージの変化とその受容過程
- 透析におけるシャントの必要性
- シャント音の意義とシャントの保護
- 意味が理解できない質問をされたときの対処方法 等々

学生と対話をし、学生の直接的経験を明確にしていくなかで、  
学生の困っている内容を絞り込んで教材化していく  
学生が自分で発見していくプロセスを大切にする

**学生の経験の深化と拡充の支援**  
＝言語化能力、状況把握能力、  
臨床教育判断能力、教育技法